

二十年後の自分

平成30年5月8日(火)

3年生は、総合的な学習の時間の中で、二十年後の自分を考えることを学んでいます。

私見ですが、高校生の二十年後の自分(三十八歳)の先には、その二十年後の自分(五十八歳)もいて、そのまた先の二十年後の自分(七十八歳)もいて、もしかしたら可能になっているかもしれないそのまた先の二十年後の自分(九十八歳)もいるのかなと思います。

二十年先までには、一年後の自分や三年後の自分や五年後、十年後の自分もおり、そのどこにも仮定できる到着点はあるのだと思います。

それでも、二十年後にする一つの意味は、仕事を持って家庭を持って、ようやく分別を理解できる一人前になる時期でもあり、論語でも三十にして立ち、四十にして迷わずといったわけであるから、ちょうどその頃までには、一区切りがつくという年齢であるともいえるのではないかと思います。余談ですが、ノーベル賞をもらう人々が、そのほとんどの人々の主なる業績の論文は、四十までに書かれた論文であるということを知ったこともあります。

おそらくそのあたりを第一の結実点として予想し、そこまでの歩みを逆算して考えることは大切なことでしょう。

おそらく真っ直ぐな道ではなく、かなり入り組んだり、行きつ戻りつしながら進む道となるでしょう。しかし、その逆算した道筋の中で、地点地点に於いて「何をしていくのか」を決めていくことは、きっと最も大切なことだと予想できます。

まず、「何をするのか」を決めていくこと。二十年後も、今も、その繰り返しであると考えます。